

---

# 僕らの冒険浪漫譚

モッチィ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らの冒険浪漫譚

### 【Nコード】

N7464V

### 【作者名】

モツチ

### 【あらすじ】

「俺は死ぬんだろうか？」

大きな地震の最中、まさか自分がそういう局面に遭遇するとは予想もせず・・・

薄れゆく意識の中、目覚めた場所は・・・まるで別世界だった。

「俺は助かったのか？」

無限に広がる何もない大地で、助かったという安堵感と夢なんじゃないかという現実を受け入れ難い気持ちが交錯する中・・・俺はとも信じ難い事実を目の当たりにすることになる。

描いた物体が現実化するという本とペンを持って・・・

僕たちの冒険は今始まるうとしている。

## 第一話 冒険のはじまり

高校二年生になった春……。勉強しか取り柄のない僕は勉強に明け暮れていた。

あつ、僕？僕は明智カケル。

カケル「そうそう、今日は放課後親友の翔君と約束をしているんだっけ。」

彼は自称ゲーマー。絵を描くのが趣味で将来イラストレータを目指している。最近ではオリジナルの剣や盾なんかを描いているらしく、力作の“伝説の剣”を描いたから見て欲しいって。ゲームを作ろうとかそういうのは全然考えてないし、僕が見てもって感じなんだけどね。

あつ、そうこうしているうちに予鈴が鳴ったよ。校門前で待ち合わせているんだ。

校門前に行くと既に翔君の姿が見えていた。

カケル「翔君、待った？」翔「ううん、僕も今来たところだよ。」

あれ？もう一人？

彰「よつ、カケル！」

今日は彰君も一緒のようだ。翔君の家に行く前に校舎の裏庭に用があるという。翔君の家は近々引っ越しをするってことで家の片づけをしていたら、おじいさんが残したと思われる宝の地図？が見つかったそうだ。

宝の地図って言っても一ヶ所に×印が書いてあるくらいの簡単な地図。その場所がどうやら校舎の裏庭を示しているようだ。

僕は後を付いていくと、

彰「ん？この辺か？」

って用意していたシヨベルで彰君が地面を掘り出した。ずいぶん準備いいことでしょっておい、勝手に掘ったりなんかしていいのか？

彰「まあ、あとで元通り埋めときゃわかんないって」

みるみるうちに彰君の姿が穴に隠れるくらい深くなっていく。この状況で先生に見つかったら確実にヤバイよね。シヨベルのコツンっていう音と共に

彰「あつ！何だこれ？」という彰君の声。

何か見つかったらしい。すると何かを手にも穴から出てきた。

彰「何だか怪しげな本が出て来たが？」

一冊の本だ！恐る恐るページをめくると・・・あれっ？全部白紙だ。

翔「あのー、それメモ帳に貰ってもいいかな？」

彰「メモ帳？ま、何も書いてないしいんじゃないか？」

翌朝・・・

昨日僕たちと別れた後、翔君は裏庭で見つけた白紙の本に今まで描いたイラストの写し描きをしたそうだ。スケッチブックより携帯性がいいいからって言うていたけどよくやるよなあ。でも、昨日見せて貰ったオリジナルの“伝説の剣”。物凄いいリアルだったよ。ああいうイラストは翔君にしか描けないなって。

すると突然、一限目開始のチャイムと同時に比較的大きな揺れを感じていた。

カケル「地震だ・・・いや、これは大きいぞ！」

先生「みんな、机の下に隠れるんだっ！」

揺れはおさまることなく、だんだん強くなっていき先生の指示で咄嗟に机の下に潜り込

む。だが、揺れはおさまらない！とその時！パリーンっっ！！

一同「キャアーーーー！！！！」

まるで超能力でグラスを割ったかのように、窓ガラスが粉々に割れた。

パニックになる教室、机の下で震えながら激しい揺れに耐え・・・そして意識は遠のいていった。

意識が戻り、目を開けると天を空に向けていた。

カケル「・・・ん、んん・・・こ、ここは？」

起き上がろうと試みると・・・身体中に激痛が走る。

カケル「ぐああっ！！！！」

まるで骨でも折れているかのような感覚。やっとの思いで起き上がると、目の前にはま

るで何もないくらい荒野が広がっていた。信じられない光景。

夢？そして信じられないモノが目の前にいた。二本の角の生えた悪魔のような顔をし、一際大きな羽が二枚、人間のように二本足で立っている化け物みたいなヤツが。どこかで見たことあるぞ？

カケル「ガーゴイル？まさか！！」

すると、一瞬目が合いこちらに気づいたのか素早い動きで向かってくる。

カケル「ヤバい、逃げよう!!」

でも、相手が本当にガーゴイルだったのなら。逃げられるはずもなく。まして身体中が痛くて動くこともままならない。

あつという間に僕の目の前に立ちはだかった。

ガーゴイル「グヘヘ、今のオレサマはとっても腹が減ってんだあ」

何か、何かないのか・・・あつ、お鍋のふた？

これで! ってこんなじゃダメだ!

そうこうしていると鋭い爪で攻撃をしかけてきた。僕は必至に転がりながら避けたが、あまりの激痛に悶えていた。次来たらもう終わり! 必至の思いで頭の上を手探りで探していると・・・何かを掴んだ!

カケル「くそつ、もうどうにでもなれっ!!」

とそいつを目の前のガーゴイル目がけて振りかざした。

カケル「終わった・・・のか?」

薄っすら目を開けると、一本の剣がガーゴイルの身体を貫いていた。状況が呑み込めず薄れていく意識の中で、通りがかった男の人が僕に声をかけていた。

## 第二話 小さな村「レドルの村」

長い夢を見ていた・・・

そして何度も何度もあの悪魔に襲われ、必至に逃げ惑う自分の姿がそこにあった。

その繰り返し。

カケル「ん、んん・・・ここは・・・」

気がつくと僕はどこかの家のベッドの上に寝ていた。  
家の造りは民家のような感じ。

カケル「確かガーゴイルに襲われて・・・助かったということは倒したんだろうか？」

記憶が定かではない。大地震の影響で頭でも打ったのかなあ。  
もっともこれが夢かもしれない？っていう・・・  
いやいや、こんな痛い夢なんて勘弁してほしいよ。

僕の体には包帯がすっかり巻かれていた。  
少しはマシになったかな・・・それでもやはりすごく痛い・・・  
痛々しい身体をゆっくりと起こす。

カケル「ここはどこだろう？何だか懐かしい感じの家だ。」

そんなことを考えながらゆっくり歩を進め、リビングらしき場所に顔を出すとおばさんらしき人が僕の姿に気付いたようだった。

おばさん「おやー！やっとな気付いたのねえー！」



おばさん「お前さん、お前さん!!」

すると旦那さんらしき人が外から戻ってきた。

男の人「ようやく目が覚めたか。もう三日も寝たきりだったんで心配したよ。」

三日も？僕ってそんなに重症だったのか・・・

カケル「ご迷惑おかけしました。助けて頂いてありがとうございます。」

男の人「いや、あの状態ではもう助からないと・・・とにかく無事で良かった。」

男の人「おっと、紹介遅れたが俺はハン。そしてこちらは家内のミレ。」

カケル「僕はカケルと言います。」

地面に倒れていたところをハンが助けて家まで運んでくれたとのこと。

どうやら身体中が悲鳴を上げていたようで、骨が折れてたくらいでは済まなかった模様。特効薬の薬草とやらを調合して傷口に塗ってくれたようだ。

ハン「それにしても・・・ガーゴイルを一撃とはな！そんな軽装でたいしたやつだ。」

やはり僕の手のあの感触は・・・でもどうやって倒したんだろう？とにかく無我夢中だったからほとんど記憶が曖昧だ。

ハン「カケル君の剣は今まで見たことないが・・・素晴らしい剣を持っているな!」

僕の剣？剣なんて僕には・・・あつ！

そういえばガーゴイルに刺さってた剣って・・・うー、ダメだ。記憶が曖昧だ。

何であんな場所に剣があるなんてこと、それ自体が理解できなかった。

カケル「ところでここはどこですか？」

ハン「どこって？レドルの村ってとこだけど・・・」

ハン「もしかして頭とか打ってないか？大丈夫か？」

レドル「まさか外国？いや、そんなはずはないだろう。」

ハン「とりあえず回復するまではうちにいたらいい。」

今の僕にはまともに動くことすらできず、ここはお言葉に甘えることにした。

そしてベッドへと戻ろうとした時、ふとあるモノが目に入った。

カケル「これがさっき言ってた剣？」

手に取ってみると相当重い・・・普通に持つのだってやつとな感じだ。

いくら火事場の何とかって言ってもコイツを振りかざすことなんて今の僕には絶対ムリだ。

カケル「あれ？」

僕はあることに気付いた。剣の真ん中にある紋章・・・

そうそれはまぎれもなく翔がデザインした“伝説の剣”と言われるやつと一緒にだった。

カケル「あのデザインだけは忘れてない。それだけ特徴のあるデザインだったから。」

でも、何でその剣がここにあるのかだけはどんなに考えても分からなかった。

カケル「とりあえず今はゆっくり眠ろう。これは夢かもしれないし。」

どうか夢であって欲しい・・・夢ならどうか覚めて欲しい・・・  
そう願いながら眠りにつくのであった。

### 第三話 反乱軍との闘い - 前編 -

ハンに助けられてから五日が過ぎ・・・

僕は特に何もすることなく傷口の回復を待っていた。

すると翌朝、目を覚ますとどこからか・・・

ブンっ！ブンっ！とバッドを素振りするかののような音が聞こえてきた。

僕は気になってその音のする場所・・・リビングの外へ向かうと、そこには木製の剣を素振りしているハンがいた。

ハン「カケル君か？悪い、起こしてしまったかな？」

カケル「いえ、自分も今起きたところだったので・・・剣の稽古かなんかですか？」

ハン「ああ、近々闘いがあるのでな。」

闘い？

聞くところによるとこの村はヴァレル地方という領土に属していて、この地方はヴァレル国王のベブレが統治しているそうだ。しかし、その国政に異を唱えている反乱軍なるものがいて・・・国王の命で各地の剣士たちがその戦いに駆り出されるということらしい。

ハン「俺も昔、城の護衛をやっていたことがあってな。それにこの村には剣士出身の人が多い。だから村総出で闘いに出なきゃいけないってしまったんだ。」

僕は戦える力があれば御世話になったお礼について気持ちはあるけど・

・

ガーゴイルに一撃を加えたのだったてきつとまぐれに違いない。

ハン「ところでカケル君はこれからどうするんだ？ 帰る家はあるのか？」

カケル「わかりません・・・記憶が曖昧でこれからどうしたらいいか・・・」

ハン「そうか。君は剣の素質がありそうだから我々に協力してくれると嬉しいんだが。」

剣を使ったことも戦ったこともないなんて正直に言うべきだろうか？  
正直に言ったら僕はこの村を追い出されてしまうだろうなあ。  
怪我が回復したらこの村にいる理由がなくなってしまうし。

そんなことを考えているとまるで心のうちを見透かされたように、

ハン「はは、そんなに悩まなくてもいい。もちろん基本的な剣の稽古はつけてあげるよ。」

ハン「これはあくまでも俺の偏見だが、君は実践経験があまりない・・・そうだろう？」

カケル「え、ええ・・・まあ・・・」

もちろん僕が剣を振るった場面を見たわけではなく・・・  
恐らく僕がガーゴイルに加えた一撃がいかにもまぐれって感じに見られたのかもしれない。

それから二日後、  
傷が完全に癒えた僕の特訓が始まった。

ハン「ああっ！そうじゃないっ！もつと間合いを詰めるんだっ！」  
カケル「はあっ、はあっ・・・」

正直言つてめちゃくちゃきつかった。運動して来なかったツケがきたかなあ。

いわゆる基礎つてやつを徹底的に叩き込まれた。

何とか流とか言つてたけど、流派なんて言われてもねえ。

実際これが何の役に立つかなんて全く分からず・・・

それでもこの人の言う通りにやっていれば上達するだろうと信じてやることにしたんだ。

一週間が経ち・・・

僕はようやくコツをつかんできたようだ。

ハン「よしっ！いいぞっ！だいぶ型は出来てきたようだな。」

カケル「ありがとうございます！ところで必殺技みたいなものは？」

ハン「ん？必殺技？なんだそれは？」

カケル「いえ、何でもないです。」

この手の剣技にはたいてい必殺技がつきものだと思っただけど・・・

はは、ゲームのやり過ぎかなオレ。

ハン「明日の稽古で総仕上げだ。明後日からいよいよ闘いが始まるからな！」

カケル「はい！宜しく願います！」

最近稽古の疲れからかくっすり眠れる。

そして朝日の光が差し込み、僕は自然と目が覚め起きあがった。

カケル「おはようござ・・・あれっ？」

リビングには誰もいない。

外からも物音すら聞こえず・・・

まだ寝てるんだろうか？

そう考えつつテーブルに目を見やると、一枚の紙切れが置いてあった。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

カケル君へ

おはよう！

このメモを見た時、我々は既にそこにはいないだろう。  
まず君に嘘をついてしまったこと、本当に申し訳ない。

闘いは今日・・・妻や小さい子供たちは城の方へ避難させている。

最初は君にも協力して貰うつもりで剣の稽古もつきあってきた。

だが、よくよく考えたら見ず知らずの旅人にこの国の為に闘ってくれだなんて・・・

虫が良すぎるんじゃないか？って思ったんだ。

闘いになれば正直いつてどうなるか分からない。

そんなどうなるか分からない状況の中に、君を巻き込みたくなかったんだ。

許してくれ。

どうかオレのことは気にせず、このまま遠くに逃げてください！

そして生きてくれ！

それが今のオレのささやかな願いだ。

短い間だったが君に出会えて良かったよ。

ありがとう。  
そしてさよなら。

ハンより

- - -  
- - -  
- - -

僕はショックだった。

助けて貰ったお礼もまだできてないじゃないか・・・

カケル「逃げろって・・・なんだよっ！」

僕がこの場から逃げて生き延びたところで、それは何の解決にもならないことくらいは分かっていた。もつと強い魔物に遭遇するかもしれない。

その時、今の自分じゃまともに闘えるわけがない。だったらもつともつと実践で経験して強くならなきゃ・・・それが今僕に出来る唯一のことだって答えに辿り着いたんだ。

カケル「今は・・・強くならなきゃ・・・」

僕が稽古で使っていたのは木製の剣。

外に置いてあった真剣を手に取り、震える手を消し去るかのようにギュっと強く握りしめた！そして、自分の寝室に置いてあった剣を背中に背負い静かに決心を誓った。

カケル「僕の危機を救ってくれた“伝説の剣”だから・・・きっとまた僕を助けてくれるに違いない。さあ、行くぞ！」



#### 第四話 反乱軍との闘い - 後編 -

僕はこの村の留守を預かるために残っていた村長を訪ねた。

村長「うゝむ、しかしなあ。お前さんには場所だけは教えるなど・・・」

カケル「僕はもう決めたんです！今僕に出来ることは闘うことしかないんです！」

村長「そこまでの決心か・・・。当然、覚悟はできておるんじやろうな？」

カケル「はいっ！」

村長「・・・いい返事じゃ！お前さんの“覚悟”しっかり受け取ったぞ！」

反乱軍のアジトはこの村から北西に歩いて20分の山岳で囲まれた地帯・・・

そこはちょうど城から南西に歩いた地点と同じ距離でもある。

僕は山影に隠れそこから下を見下ろすような感じで様子を見ることにした。

ハンを先頭に村人たち数人と城の兵士だろうか・・・ざつと30人くらい。

相手の反乱軍とやらは、身なりが山賊のような格好で片手に斧を持っている。

ガタイの大きさが一際目立つ威圧感のある男が一人・・・カレがボスだろうか？

数的には反乱軍の方が50人近く・・・

だが、こっちは全員真剣と盾を装備している。力では負けてないはずだ。

反乱軍ボス「ノコノコときやがったかあ！ハッハ、どんだけ暇だったんだ。」

ハン「確かに暇なやつらかもな。だが、悪しき種は早いうちに摘み取っておかねばならないのでね。特に・・・国王陛下に反する悪しき種はっ！」

反乱軍ボス「ケっ！正義ぶってるつもりかあ？あんなやつに政治を任せておけねえ！それこそおめえたちだって捨てられちまうかもしれないねえってのになあ！」

ハン「・・・話じゃ解決できそうにないな。もっともそんなことは想定済みだが・・・」

カケル「舌戦必至だな・・・でも闘いは免れそうにないな。」

\*\*\*「うわあゝ戦争始まつちやのかなあ？」

カケル「！？」

僕のすぐ近くでそうつぶやく声が聞こえた。

そして横を振り向くと・・・あれ？どこかで見たことのある顔が・・・

・

カケル「シヨウ！」

シヨウ「えっ！？も、もしかしてカケル君？？」

僕は目を疑った。

だって、これは夢で・・・自分以外の知ってる人がここにいるなんてこれっぽっちも想像してなかったわけだから・・・はは、これで僕の夢だって確率は減ったわけだ。

シヨウ「知ってる人誰にも会わないからたぶん夢だっと思ってただけど・・・」

シヨウ「でも、良かった！カケル君も無事みたいだし！」

カケル「はは、無事・・・でもなかったんだけどね。」

シヨウ「えっ？」

カケル「ほら、あの剣と盾を持った左側の軍の先頭・・・実は倒れているところをあの人に助けて貰ったんだ。おかげで怪我也完全に回復したしね。」

シヨウ「そんなことがあったんだ。ということはカケル君もあの闘いに？」

カケル「ああ、参加する・・・はずだった。」

シヨウ「はず・・・だった??」

事のいきさつを簡単に話した。

そして、この闘いに望むという決心も・・・

シヨウ「正直難しいよね・・・もしかしたら稽古の段階でカケル君の“力量”を知ってしまったのかもしれないし。」

カケル「わかってるよ。たったの数日間稽古をしたくらいじゃたかがしれてるっていうことくらい・・・たとえ夢であっても僕の身体は“普通の高校生”のままなんだから。」

シヨウ「そうか・・・僕が今ここに意味っていうのは決して偶然なんかじゃないかもしれないね。」

カケル「えっ？それはどういう・・・」

シヨウは持っていた小型のバッグから一冊の本と一本のペンを取り出した。

シヨウ「この“魔法の本”と“魔法のペン”が僕をここに導いてくれたんだ！」

カケル「その本どこかで・・・」

そうだ！

宝の地図を頼りに校舎の裏庭で見つけた全ページ白紙の本・・・  
そんなものが何だってここに！？

シヨウ「頼に冷たいモノを感じて・・・気付いたら僕は川の浅瀬に  
うつぶせになって倒れていたんだ。しかも、かすり傷一つしてな  
かった。信じられないよね？」

シヨウ「で、僕が気付いた時には既にローブとマントを身につけて  
いて・・・左手にはペンを、右手には本を握りしめていた。とっさ  
に思ったのがこれは何かの夢なんじゃないか？って。」

シヨウは更に話を続けた。

シヨウ「どのくらい時が経ったろう・・・ふと僕の手を持つてる本  
が見覚えのあるものだって気付いたんだ。そう、あの日裏庭で見つ  
けた白紙の本・・・ページをめくると僕の描いたイラストがそのま  
ま残っていたんだ！で、このページを見てよ！」

というと、あるページを開いて僕に見せてくれた。

そのページは何も描かれていない・・・白紙のページのままだった。

シヨウ「このページの前後にはイラストが描いてあるのにこのペー  
ジだけ。僕の記憶ではびっしり描いたはずなのに・・・と僕はこの  
ページに描いたイラストをおぼろげながら思い出したんだ。このロ  
ーブとマントを描いたってことをね！」

オレはシヨウの言っている意味を咄嗟に理解することはできなかつ  
た。

だが、さてよ？するとこの剣っていうのは・・・

シヨウ「カケル君！その剣って・・・」

カケル「ああ、知らない間に持っていたというか・・・オレもよく分からないんだけど。」

シヨウ「やつぱり・・・この本は描いたイラストが具現化されるんだ。」

カケル「それじゃこの剣はシヨウの描いた“伝説の剣”そのものなんだな。何だか信じられない話だけど・・・はは、そもそも今の状況がホントかウソか分からないけどな。」

シヨウが言うにはこの剣には“デイベイディングソード”という名前があるらしい。

さすがに一回じゃ覚えられないな・・・もつとも伝説の剣っていうほどすごい威力があるのかどうか現時点では不明だけど。

魔法の本と魔法のペンはセットになっていたらしい。

あの時ペンがあったのかどうかは定かではないが、普通のペンでは何もうつらなかったようだ。あぶり出してみたいな仕組み？と描いた時はあまり疑問にも思わず・・・

シヨウ「ごめん、これから闘わなきゃいけないっていうのに話長くなっちゃったね。詳細は後でゆっくり話すとして・・・」

シヨウは魔法の本の最後のページの方をめくりオレの前に差し出した。

シヨウ「実はステータスも具現化されることが分かったんだ。ホントは今じっくり説明したいところなんだけど・・・とりあえずここに名前と特技を二つ書いてくれればレベル1からスタートするから。」

カケル「名前は本名を書けばいいの？で、特技って？」

ショウ「いや、名前はニッケネームでもハンドルネームでも何でも大丈夫だよ。ただこれから何かで名乗ることはあるかな？無難な名前であれば。特技は・・・そうだなあ、必殺技とか？技のイメージをしながら技の名前を書くとそれが実際の必殺技として使えるから。

「

ショウには悪いが、その説明で理解しろっていうのが無理があると・・・

でも、今は言われた通りにするしかなかった。

必殺技のイメージはオレの頭の中には何となく・・・剣で闘うなら“力とスピード”その二つさえあればそこそこ闘えるんじゃないかって思いがあってね。それが活かせる必殺技を考えていたんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7464v/>

---

僕らの冒険浪漫譚

2011年10月9日12時58分発行